

白石一郎

江戸の海



江戸の海

白石一郎



文藝春秋

著者略歴

1931年、釜山に生まれる。早稲田大学卒業。
1987年、「海狼伝」で第97回直木賞を受賞。
著書に「火炎城」「海王伝」「戦鬼たちの海」など多数。

江戸の海

平成四年四月三十日 第一刷

定価はカバーに表示しております

著者 白石一郎

発行者 阿部達児

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話(〇三)三二六五―一二一一

印刷所 大日本印刷

製本所 中島製本

万一、落丁乱丁の場合は
お取替え致します

© Ichiro Shiraishi 1992

Printed in Japan

ISBN4-16-313200-7

江戸の海／目次

江戸の海

5

島火事

31

十人義士

55

海の御神輿

75

勤番ざむらい

105

夕凧

137

悪党たちの海

169

人呼びの丘

201

海の一夜陣

223

トトカカ舟

255

装幀
蓬田やすひろ

江戸の海

初出誌

江戸の海

「小説新潮」一九九一年二月号

島火事

「オール讀物」一九九〇年七月号

十人義士

「オール讀物」一九八九年十二月号

海の御神輿

「オール讀物」一九九一年五月号

勤番ざむらい

「別冊小説宝石」一九九〇年五月号

夕風ぎ

「オール讀物」一九九〇年十一月号

悪党たちの海

「別冊小説宝石」一九七九年十二月号

人呼びの丘

「オール讀物」一九九二年二月号

海の一夜陣

「別冊歴史読本」一九八九年三月号

トトカカ舟

「小説新潮」一九九二年二月号

江戸の海

一

狭い長屋の家の中なので暗いうちから岩蔵が起きだし、土間でごそごそと身支度をはじめのが女房にはわかった。

蓑笠みのかさをまとい釣竿を担いで出ていく後ろ姿に、

「お前さん、今日は仕事ではなかったのかい」

岩蔵は振り返り、ちょっと口ごもって、

「親方の仕事場へは三日つづけて通った。三日働いて三日休むのがおれのきまりだ」

「いつまでもそんな勝手ばかりして……いまに仕事も貰えなくなりますよ」

「そのときは他の仕事を探ささ」

寢床の中から声をかける女房に背中を向け、岩蔵は外へ出た。

明け六ツの鐘は鳴ったが、まだ外は薄暗がりだ。両国米沢町の割長屋から薬研堀やけんぼりの元柳橋を渡

り、大川の川沿いに岸壁を歩く。

永代橋を渡って深川へやってきた頃、ようやく空が白んできた。

岩蔵はまだ人通りの少い深川の門前町をまっすぐ東へ突っ切って歩き、洲崎弁天社を通り抜けて海岸へ出た。このあたり白砂の浜がつづくが、岩蔵が狙いをつけている磯場が一つある。ハゼとキスの群がってくる穴場だ。

岩蔵は用意した二本の竿に手早く道糸をつけ、小蝦の餌を鉤につけて海へ垂らした。

しばらく待ったが魚信がない。少し時刻が早すぎたのだろうと思い、昨夜のうちに用意しておいた竹皮包みの握り飯を三つ喰った。

霧が陽光に裂かれて動きはじめ、江戸湾の景色がしだいに明るく見えてきた。

千石船の裸の帆柱が林立しているのは佃島の人江である。隅田川が海へと流れ入る深川沖、品川沖にも大船が十数艘碇泊していた。

江戸湾の船着場は佃島の対岸の鉄砲洲だが、ここは浅瀬で大船は接岸できない。かわりに船問屋、薪、炭問屋が軒を並べ、その岸壁から小型の荷船が沖合へひっきりなしに往来している。

霧が晴れあがると総州や房州の山並みの緑が眼にしみるほどあざやかに見えてくる。

人気のない早朝、ここへきて釣糸を垂れ、静かな波音を聞きながら、晴れてゆく海を見るのが、岩蔵の極楽だった。間もなく魚がかかりはじめ。そうなるとこの世の時間は消える。青色の網でつくった魚籠が海に漬けたまま両手で持ちあがらないほどになったとき、そろそろ夕暮れが迫

っている。至福の一日の終りだ。

釣竿の一本が動き、岩蔵が地面に横たえた竿を手に取り、大きなハゼを釣りあげたとき、菅笠を冠^{かむ}った着流しの一人の武士が背後から現われた。

「やあ早いな、相変わらず」

岩蔵はハゼを魚籠へ移しながら、

「旦那も」とこたえた。

釣り場の顔馴染みである。ここはあまり人に知られぬ穴場だが、この武士もよほど釣り好きなのだろう。

「いい眺めだ」

武士は菅笠を傾けて江戸湾とその向うの山々をみつめ、それから手早く支度にかかりながら、

「これしか楽しみがないからな」

糸を垂れたとたんに竿が揺れた。大きなキスだ。またすぐにきた。

「旦那、竿が変りましたね」

岩蔵が横眼で武士をにらんだ。

「ああ、去年の十月頃、山へ行つて女竹を取ってきた。漆塗りして乾かしておいたら、ちょうど手頃の重さになった」

「おっと、きた……」

岩蔵が引きのつよさにちよつと腰をあげかけたとき、右手の崖を回って不意に一艘の屋根船が現われた。

「ほう、またあの女だ」

と武士がつぶやいた。

「船頭二人のお供つきか。豪儀なもんだな」

弁天社前に並ぶ船宿の船だろう。頭巾を眼深^{まぶら}にかむり、上品な衣裳を着た女が、いつも一人で釣竿を船べりに立てかけて屋形の中に座っている。見ていると佃島の沖合あたりで一刻（二時間）ばかり釣り、それからここへ戻ってきて船宿に帰る。

二人はもう何回かこの女を見ていた。向うも見覚えたのか、船の中から女が二人を見て、軽く会釈した。

沖へ漕ぎ出て行くかに見えた船が、こちらへ戻ってきたのにはおどろいた。

船を岸へ着け、船頭の一人が手を振りながら二人のそばへやってくる。

「ごいっしょに釣りませんかと奥様がいつてゐるんで。よかったら船にどうぞ」

岩蔵と武士は顔を見合わせ、それからいっせいに船の中を見た。

頭巾の女の眼が笑い、ていねいに頭をさげた。

武士は腰をあげ、半ばそのつもりで支度しながら、

「どうする」と岩蔵にきいた。

岩蔵は動かず、首を横にふり、

「あっしはいやだ。だいいち岡釣りの支度をしてきて、沖釣りの道具はもってきてない」

「そういえばそうだな」

「旦那はどうぞ」

「いや、ちよつと行つて断わつてこよう。折角の親切を無にはできない」

武士は釣り道具をそのままに残し、船頭の一人のあとについて屋根船のほうへ向つた。

いったん船に乗り、互いに辞儀をしながら女と話し合つていたが、岩蔵がびっくりしたのは、武士といつしよに女が岸へおりてきたことだ。しかも釣竿と魚籠を持つている。

「このお人は」

岩蔵のそばに戻つてきて武士はいつた。

「岡釣りをしてみたかったんだそうだ。ここで釣らしてほしいといっている」

岩蔵は疑わしそうな眼で女をみた。

「このお人の道具を見てやつてくれ。鉤も糸も岡釣り用だ。こんな道具で沖釣りしても、小魚ぐらしいか掛からんだろう」

女の釣り竿を武士が手に取つて岩蔵に見せた。いかつい古武士のような岩蔵の顔がいくらか綻ほころんだ。

「ここにお座りなさい」

と武士は女の釣り場所をきめてやり、

「的場金八郎といいます」

と自分の名を告げた。

「おさえでございます」

と女が二人に名乗った。

「ところで、おぬしの名は？」

と武士がはじめて岩蔵に聞き、岩蔵は仕方なさそうに名をつげた。

二

的場金八郎は本所小名木川の川端にある屋敷へ戻った。屋敷といっても七十俵五人扶持の御家人の侘び住いである。板塀は色褪せて朽ちかけ、庭草が生い茂っている。

二年前に妻に去られ、屋敷は卒中で寝たきりの老父と口ばかり達者な母親、妹は嫁入って家にはいない。

母親は魚籠一杯に提げてきた魚を見て台所で選り分け、

「井上監物さまの御屋敷にお届けしておいで。これぐらいのハゼなら天ぷらにして召し上がって下さるかもしれない」

井上監物は三千石の小普請支配、無役の幕府御家人の総元締である。

「とどけるといっても御屋敷は神田ですよ。こんな時刻に……」

「ばかだねえ、御妾宅が深川冬木町にあるというじゃないか。よくお見えになるという噂だよ」

「そんな妾宅にまで」

井上監物の神田の屋敷には金八郎は毎月二回、早朝に顔を出している。無役の御家人の中でも御目見^{ゆめみ}得^え以下の侍たちが監物の屋敷の広間^{ひろま}に集^ひいて参集^{さんしゅう}し、一人ずつ名を名乗り、

「御支配さまには益々御勇健」

と挨拶する。それに対して井上監物は、

「御支障^{おさわ}りもなく」とこたえる。

それだけである。御役につきたい一心から、自分の特技や希望などを文書にして置いて帰るが、読んでくれるかどうかも覚束ない。

同じことをもう八年もつづけているのだ。

「用がなくてもよい。毎日のように顔を出せ。勝手口から訪ねて、女中どもと口を利く。そうなれば出入りはしやすい」

そんな風に教えてくれる者もいて、一、二年はやってみたが、何の音沙汰もなかった。

金八郎の父親の的場金兵衛は生涯無役の御家人である。終身休職のようなものだ。生来の病弱でそうなったのだが、要するに幕府の厄介者だった。

その息子の金八郎に出世の目はまずない。

井上監物の妾宅のことは耳にしているが、妾宅にまで顔を出し、御番入りを願うほどの熱意は金八郎にはない。

母親が喧しいので竹籠に入れた魚を風呂敷包みにし、片手に提げて屋敷を出た。

小名木川の川べりを歩きながら思いだしたのは同じ本所の林町一丁目に住むおたえのことである。もう一年以上も別れた妻の顔を見ていない。

おたえは十七歳で二十一歳の金八郎に嫁いできた。ちょっと知恵おくれではないかと思うほど幼く、姑に叱られ放して一年も居つかず出てしまった。

林町のおたえの家との交際も絶えた。釣った魚を手土産にとどけるくらいはいいだろう。そう思つて訪ねたが甘かつた。

「何か御用でしょうか」

玄関に出てきたおたえの母親はけんもほろろの顔つきで、

「おたえにはいま縁談がまともりかけています。いまさらお訪ね下さるのは遠慮して下さいませ」

そう言いながら竹籠に入った魚だけはちゃっかりと受取り、

「あなたはいい方なのだけどねえ、お姑さまがあれでは」

金八郎は早々に退散した。ひとめおたえを見たいと思つた気持も、もう萎えていた。

本所深川界隈に夕暮れが迫っている。木置場の多い淋しいところだ。土蔵の白壁が赤く夕陽に